

令和7年度 事業報告書 下京いきいき市民活動センター

【指定管理者:MACHISHIGOTO 合同会社】

1. 管理運営の状況

1 施設運営業務

(1) 職員体制

センター長 1 名、職員 10 名（常勤：3 名、非常勤 7 名）

【人材育成の取組】

- ・ 公共施設の管理運営に関する基本業務について、OJT（職場内訓練）を実施し、各スタッフが適切に業務を遂行できる体制を整えています。
- ・ 全体研修を通して、市民活動センターのスタッフとしての支援力向上やノウハウ共有などを行っています。
- ・ 定期的な面談を実施し、個々のスキルアップやキャリア形成を支援するとともに、ワークライフバランスの状況確認を行っています。
- ・ 月 1 回の全スタッフ参加による定例会議を実施し、施設運営上の課題や事業進捗を共有しています。現場の問題を早期に共有、解消できる仕組みを構築し、円滑な運営に努めています。

(2) 貸館等

ア 利用件数

(月別)

4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
305	328	357	359	349	387	447	393	351	352	358	397

(年間)

4383 件（前年度比 108%）

11,299 時間（前年度比 117%）

イ 利用状況

- ・ 利用件数、利用時間数ともに昨年度を上回る実績となりました。特に、10 月は前年度と比べて、143 件、338 時間の大幅な増加を記録しています。
- ・ 令和 7 年度より実施した 3 階会議室(会議室 3 および和室)の利用用途改訂が、全体の数値向上に大きく寄与しています。音楽利用ニーズに対応し、楽器の種類に制限を設けつつも 3 階全室での演奏を可能としたことで、各部屋の稼働率が上昇しました。
- ・ 集会室の土日利用については、3 ヶ月前の予約開始数週間で終日満室となる日程もあります。また、土日の日中(10 時～17 時)の時間帯は、他のお部屋においても予約が集中する傾向が見られます。
- ・ 一方、平日については、稼働率の低い曜日や時間帯があります。特に 17 時以降は空室が発生していることから、今後はターゲットとなる利用層を見極め、広報していく必要があります。
- ・ 新規団体登録は、月平均 13 件の申請がありました。既存利用団体からの紹介や、施設掲示板などをきっかけとした申請が主な要因となっています。

ウ 利用促進に向けた取組

- ・歩道に面した掲示板において、施設案内やイベント情報を継続的に発信し、通行者への認知度向上を図りました。
- ・新規登録者や来館者に対し、認知経路に関してお尋ねをし、得られた回答に基づき、効果的な周知方法の検討に努めました。

エ その他

サロン利用人数(述べ) 434 人(昨年度 361 人)

- ・常駐スタッフとの相談や交流を目的とした来館者も見受けられ、昨年度を上回る来館につながりました。
- ・定期的に利用する高齢者グループに加え、芸術大学の学生や親子連れなど、幅広い世代の来館が段階的に増加しています。
- ・施設の立地が分かりにくいという課題に対して、外部からの視認性を高める工夫が求められます。今後は、看板の設置や掲示板の充実を図り、日常的に利用可能な施設であることをより広く周知していきます。

(3) 情報発信等

ア 取組実績

- ・ホームページや SNS (Facebook、Instagram) を活用し、実施事業の報告や貸館情報を定期的に発信しました。
- ・センターで展示を行う芸術大学の学生や利用団体へのインタビュー記事を掲載しました。単なる情報の羅列ではなく、活動の背景や魅力を伝えることで、読者の関心を高め、来館や活動参加を促す工夫を行いました。
- ・地域の行事や下京区内で開催されたイベントに関する情報を発信しました。

イ 取組の効果

- ・掲載したイベント情報や事業報告に対し、SNS 等を通じて「次回は参加したい」といった参加意欲を示す反応が寄せられました。

(4) 管理運営

- ・法定点検としてある、消防用設備点検、空調保守点検、建築設備点検、定期清掃などは業者に依頼し、期日までに実施をしました。
- ・上記の法定点検以外にも、日常的に施設の維持管理を定期的に行いました。
- ・防火管理者の選定、消防訓練など緊急時の対応を検討しました。
- ・その他、備品等の保守管理、保安警備業務等を実施しました。

(5) その他

- ・今年度も引き続き、近隣施設(デイサービス、包括支援センター、青少年活動センター、児童館)との連携を維持し、円滑な施設運営を図りました。
- ・地元の自治連合会や下京区役所と定期的な協議や連絡の場を持ち、情報共有を行い、地域の状況を理解した運営に努めました。

2. 市民活動支援・活性化事業及びサロン運営・活用事業

【事業名】若者の力・アートの力を活用した地域課題解決の創造・伴走支援事業（市民活動支援・活性化事業）

事業の概要

- 1 開催日時：① 令和7年4月～令和8年3月
② 令和7年5月～令和8年3月
- 2 開催場所：下京いきいき市民活動センター
- 3 参加人数：①相談件数(延べ) 68件 / ②支援企画：3事例
- 4 協力団体等：京都市立芸術大学、下京青少年活動センター、七条第三児童館
- 5 ①予算：925,000円 / 決算：911,419円
②予算：965,000円 / 決算：926,215円

1 事業内容

① 若者による地域活動の相談窓口の開設・伴走支援

今年度は地域活動に関する相談 68 件に対応し、以下の 3 件を重点事例として伴走支援しました。

第一に、京都第 1 号のコミュニティナースの活動拠点づくりを支援しました。移動販売の場を交流拠点として提案し、ハンドトリートメントを通じた住民との関係構築を全 7 回継続。地域に溶け込む基盤を構築しました。

第二に、キッチンカーを活用した出張相談窓口を京都市立芸術大学内に開設しました。シニアグループ「かもちゃんクラブ」が参画し、手料理や箸袋制作を通じて学生との多世代交流を実現しました。

第三に、商店街と児童館、芸大生が連携した「七条空想プレイハウス」を開催しました。まちあるきや空き家活用案の検討を通じ、子どもの創造力を地域資源に結びつける活動を展開しました。

② 芸大・美高生による地域アートプロジェクトの促進

京都市立芸術大学の学生・教員と連携し、地域資源を活かしたアートプロジェクトのコーディネートを行いました。

主な取組として、第一に彫刻専攻院生による展示「猫を探しています」を支援しました。センター内のロビー空間を活用し、地域から着想を得た作品を展示することで、住民が日常的に芸術に触れる機会を創出しました。

第二に、卒業制作「ふたつの居場所」において、学生と地元の喫茶店 2 軒を仲介しました。店内での音声収録や展示のプロセスをサポートし、地域の日常をアートとして再構成する活動を後押ししました。

第三に、油画専攻による「街の中の風景画展」を実施しました。まちあるきを通じて地域の歴史や文化を反映した作品を展示し、住民が馴染みのある風景を新たな視点で捉え直す場を提供しました。

2 準備段階での工夫

京都市立芸術大学の教授や下京青少年活動センターのユースワーカーなど、周辺施設の専門職と継続的な情報交換を行いました。その結果、各施設からセンターへ相談者を繋いでいただく事例や、外部評価を通じた信頼の広がりにより、新規の相談や照会につながるケースが見受けられました。

3 事業実施による効果・達成度

(1) 当初の事業効果、目標等

- ・若者による地域活動の事例を4件以上創出することを目標に設定しました。
- ・活動系経験の少ない若者が直面する心理的、実務的な障壁を緩和することを目指しました。センターによる伴走型の相談支援を行うことで、活動着手へのハードルを下げ、円滑な実施を促すことを意図しました。

(2) 事業実施による目標の達成度

①では、これまで地域との接点が少なかった学生がセンターでの取り組みを通して、地域住民や関係機関との連携体制を構築し、地域活動における第一歩を踏み出すことができました。若者による主体的な活動がきっかけとなり、その実施過程において、多様な世代との交流が生まれました。

また、活動継続を通じて、対象者(子どもや高齢者)に変化がみられる様子がありました。具体的には、今まで口数が少なかった独居高齢者が積極的に場に参加し、会話する様子や控えめだった子どもたちが積極的に自分たちの意見やアイデアを出し合い参加する様子などがみられました。

②では、展示機関中、出展した学生や教員が来館者に対して自律的に作品解説を行う姿が確認されました。アートを媒介としたことで、日常的には接点の少ない層同士に自然な会話や交流が誘発され、コミュニケーションの場を創出することができました。展示に携わった教員および学生からは、センターの相談しやすい支援環境や地域住民に直接作品を公開できる点について、好評です。

また、作品を鑑賞した地域住民からは、作品に対する感想が寄せられました。

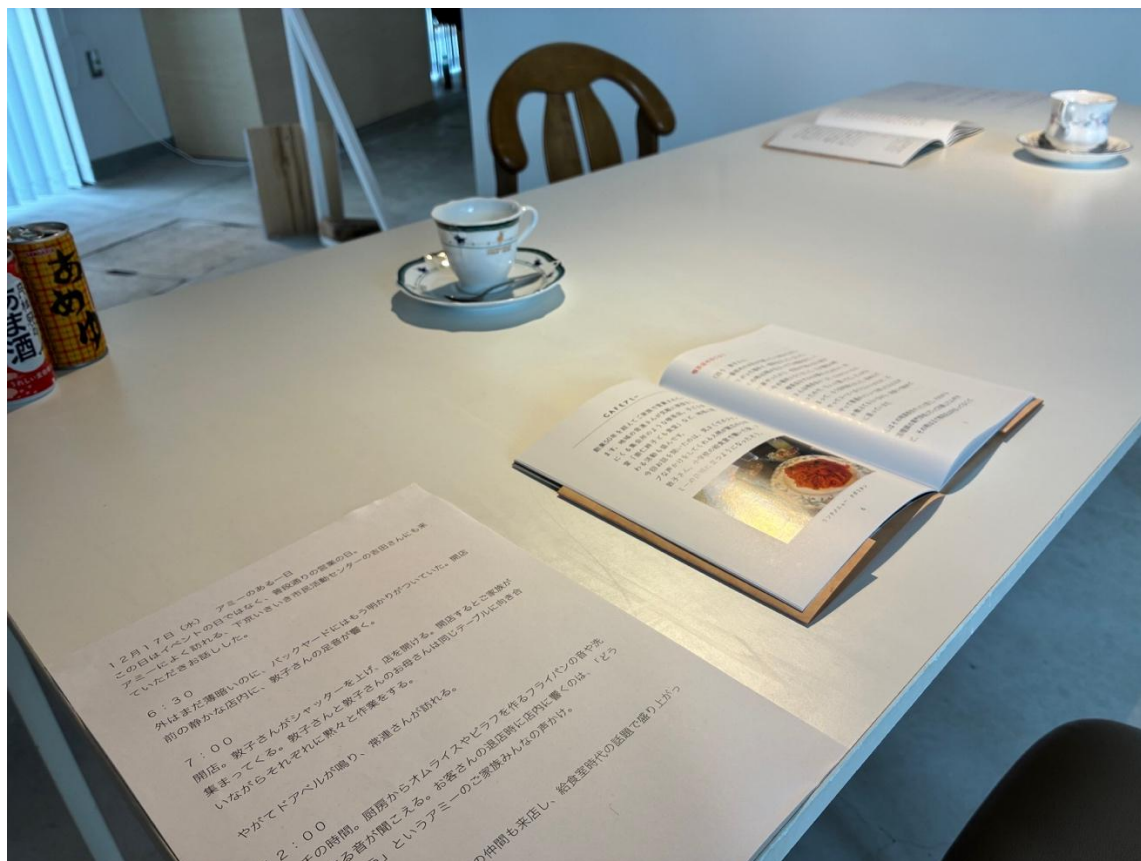
4 今後の抱負

単発的なイベントとして実施するものがある一方で、継続的な活動へとつなげていくためのサポートを検討していく必要があります。特に学生においては、大学の卒業に伴い活動一区切りがつくケースが多くあります。その中で、地域における活動をどのような形で残していくのか、あるいは一過性のものとして完結させるのか、地域と若者の双方にとって最善な在り方を検討していく必要があります。

① コミュニティナースの活動拠点づくり支援



② 京都市立芸術大学 作品展 2026 「ふたつの居場所・まちに重なる音-」



2. 市民活動支援・活性化事業及びサロン運営・活用事業

【事業名】一人ひとりがまちの主役になる「ともにすごすツアー」を通じた市民エンパワメント事業（市民活動支援・活性化事業）

事業の概要

- 1 開催日時：①令和7年6月14日 / 11月30日 / 12月7日（計3回）
②令和7年7月～令和8年3月
- 2 開催場所：①下京区各所 ②下京いきいき市民活動センター
- 3 参加人数：①述べ21名 ②ポッドキャストフォロワー30名
- 4 協力団体等：七条中央サービス会、崇仁デイサービスうるおい、崇仁児童館
- 5 ①予算：1,145,000円 / 決算：1,140,660円
②予算：535,000円 / 決算：5165,489円

1 事業内容

①地域の一人ひとりが主役になる「ともにすごすツアー」の実施

個人の視点や哲学に共感し、地域の新たな魅力に触れるマイクロツアープログラムを実施しました。

第一に、「商店街の表裏」では、ボランティアなどで商店街に長く関わる方と商店街を巡りました。買い歩きや仕事体験を通じ、参加者は商店街の人の温かさや多面的な魅力に触れました。

第二に、「樹木の記憶」では、アーティストと崇仁地域の樹木を巡るフィールドツアーを行いました。挿し木や地植えされた樹木一本一本に込められた、住民の想いや記憶に想像を巡らせました。

第三に、「牛すじの煮ごり」では、アーティストと共に地域の伝統料理を再現しました。調理体験を通じて、食文化の背景にある当時の暮らしや人々の心情への理解を深める機会となりました。

②プロジェクトに共感するコミュニティの形成

「ともにすごすツアー」を基軸に、個人の生活や価値観を緩やかに開示し合える関係性の構築を目指しました。

本年度は、副業型研究員 EKKYO と連携したオンラインミーティング「朝からともすご研究会」を計8回開催し、居住者の価値観を表出させる「仕掛け」について検討を重ねました。その成果として、京都駅東部エリアの日常の声を届けるポッドキャスト番組「ハイパーローカルラヂオ」を制作。近隣4施設に寄せられた意見の紹介や、地域住民をゲストに招いた収録を行いました。

7月から3月にかけて計17本を配信し、延べ再生数227回を記録。メディア発信を通じて、地域の多様な視点を可視化する試みを展開しました。

2 準備段階での工夫

①では、個人の視点や大切にされている考えがツアーに反映されるよう、事前の対話を重ねました。これまで継続してきた取り組みであることも踏まえ、企画者本人の主体性を

大切にしながら準備を進めました。

②では、地域の方々の声を幅広く集めるため、青少年活動センター、デイサービス、児童館など、さまざまな団体と協力体制を整えました。準備の過程では、都度、コミュニケーションをとり、進めました。

3 事業実施による効果・達成度

(1) 当初の事業効果、目標等

- ・ ツアープログラムの実施件数 5 件、およびコミュニティ参加者数 50 名を目標として設定しました。
- ・ 企画者個人の視点による、地域の良さや魅力を知り、参加者の共感を得る取り組みを目指しました。単なる一時的なイベントに留めず、終了後も継続的な関心を維持し、地域への再訪を促すなどのきっかけとなる機会を創出することを目的としました。

(2) 事業実施による目標の達成度

①では、プログラム実施数 3 件(目標 5 件)、参加者数 21 名(目標 50 名)となり、定量的な目標については、未達成となりました。要因として、準備段階での広報が十分にできなかったこと、新しい企画者の発掘ができなかったことが挙げられます。

一方、当初の目的であった、「企画者個人の視点を通じた共感の醸成」については、新聞等のメディア掲載による周知効果や参加者の高い満足度、さらにツアー実施後の再訪事例が確認されるなど、質的な側面にびては、一定の成果が得られました。

参加者からは、大型店舗では得られない人の温かさを実感したという声や、伝統的な食文化に込められた想いに触れ、地域の歴史を追体験する貴重な機会となりました。また、子どもから大人まで幅広い世代が参加し、交流が生まれました。

②では、毎月 100 件を超えるアンケート回答が寄せられ、想定を上回る規模で地域住民の参画を得ることができました。デイサービスを利用する高齢者から児童館を訪れる児童まで、幅広い世代が自信の生活や価値観を言語化、表現する機会を創出しました。

また、アンケート記入場所や掲示すぺー図が、地域住民同士の自然な対話や交流を誘発する「場」として機能しました。

4 今後の抱負

本年度の取り組みを通じて、共感に基づく場やコミュニケーションの場を創出することはできましたが、地域や個人に対する持続的な行動変容や社会的な波及効果という点では、さらなる進化の余地があると考えています。

事業における課題を整理し、企画者が自律的に活動を継続できるような、持続可能な仕組みの構築を検討していきます。

① 「牛すじ煮ごり、つくりませんか？」 ツアーの様子



① 食べておいしい、喋ってあったかい 商店街の裏表



2. 市民活動支援・活性化事業及びサロン運営・活用事業

【事業名】ダイバーシティを学び・表現するための多世代交流拠点化事業（サロン運営・活用事業）

事業の概要

- 1 開催日時：①令和7年5月～令和8年3月(随時)
②令和7年5月～令和8年3月(随時)
- 2 開催場所：ふれあいサロン、下京いきいき市民活動センター 1階ロビー
- 3 参加人数：来館者述べ 431名
そもそもケンキュウカイ：9名(8月7日開催)
夏休みこども体験ワンダーDAY：20名(8月21日開催)
みんなのあそびば実験室：27名(1月19日開催)
うたごえ広場：173名(9回開催)
- 4 協力団体等：下京東部地域包括支援センター
- 5 ①予算：725,000円 / 決算：624,960円
②予算：455,000円 / 決算：444,786円

1 事業内容

① 誰もが気軽に立ち寄れる空間づくり

ふれあいサロンを多世代が気軽に利用できる場とするため、環境整備と来訪促進を継続的に実施しました。

施設管理面では、日常の清掃や樹木の伐採に加え、不具合のあった扉の修繕を行い、安全で快適な空間を維持しました。活用促進面では、シニア女性の運動サークル「かもちゃんクラブ」の活動を軸に、多世代交流を促進しました。ラジオ体操や折り紙など、共に手やからを動かせるプログラムに京都市立芸術大学の学生らの参加を呼びかけた結果、継続的に1～2名の学生が加わるようになりました。こうした取り組みにより、サロンにおいて世代を超えた交流が日常的に行われる基盤を整えました。

② 地域の多様な声を活かした取り組みを生み出す場づくり

ふれあいサロンやロビーを活用し、多様な声の収集と課題解決に繋がる場づくりに取り組みしました。

第一に、哲学対話の手法を用いた「そもそもケンキュウカイ」を開催しました。「はたらく」をテーマに社会人と大学生が対話し、新規層の来館を促しました。

第二に、「夏休みこども体験ワンダーDAY」では、落語やマジックなど5つの利用団体が講師となり、小学生向けの体験型ワークショップを実施しました。

第三に、「みんなのあそびば実験室」を実施し、音楽やゲームを通じて、通行人がふらりと立ち寄り交流できる空間を創出しました。

第四に、「うたごえ広場」では楽器演奏を通じた交流を図り、デイサービスへの訪問演奏等を通じて地域への活動還元を行いました。

2 準備段階での工夫

センター利用団体が協力するイベントにおいて、事業趣旨への理解を求め、企画段階から主体的に参画いただけるよう、うちあわせを重ねました。

広報チラシを作成し、下京区内の飲食店や諸施設へ配架依頼しました。直接訪問による対面での依頼を積極的に行い、各施設との関係性を深め、地域に根ざした周知活動に努めました。

3 事業実施による効果・達成度

(1) 当初の事業効果、目標等

- ・サロン利用者 700 名、およびイベント開催数 10 件以上を目標に設定しました。
- ・ふれあいサロンやロビーの効果的な活用を通じて、子どもから高齢者まで多様な層が集い、交流を深める場を目指しました。どちらかが、与える / 与えられるといった固定的な役割に留まらず、参加者一人ひとりが主体となり、共に活動を創出することを目的としました。

(2) 事業実施による目標の達成度

①では、昨年度比で 100 名以上、来館者増でしたが、目標人数には至りませんでした。ただ、シニア層の活動に大学生が参画したり、乳幼児を連れた近隣世帯が日常的に来館したりするなど、多世代が活用できる施設としての認知が少しずつ広がっています。

②では、センター利用団体に対して日々の活動を活かす機会を共同で実施したことで、各団体の意欲向上を促すことができました。特に、これまで新たな企画への着手を検討していた層に対し、実践の場を提供できました。さらに、通常は接点の少ない利用団体同士が、イベント運営を通じて対面・交流する機会を創出し、団体間の相互理解にも繋がりました。

4 今後の抱負

今年度の目標であった来館者数 700 名には届きませんでした。当サロンは立地としてわかりにくいため、初めて訪れる方でも迷わず来館できるような仕掛けづくりや、既存利用者を介した口コミによる広報など、周知方法を検討していく必要があります。

② そもそもケンキュウカイ



② 夏休み子ども体験ワンダーDAY！



3. 利用料金の収入実績及び管理運営に係る経費の収支決算

- 1 利用料金の収入実績
令和 7 年度実績：7,509,280 円（前年度比 118%）
内訳 会議室等：7,429,600 円
付属設備：79,680 円 ※自主事業分を除く
- 2 管理運営に係る経費の収支決算
別紙収支決算書のとおり

4. 施設の利用者満足度の把握

- 1 利用者満足度の把握状況
(1) 全センター共通窓口サービス調査
【実施時期】 令和 7 年 1 1 月実施
【調査項目】 窓口サービス
(2) センター独自アンケート
事業実施時にアンケートを実施

2 利用者満足度把握の結果

(1) 全センター共通窓口サービス

	満足	普通	不満	無回答
① 案内表示の わかりやすさ	73.3%	25.7%	0%	1%
② 挨拶や声かけ	82.2%	16.8%	0%	1%
③ 身だしなみ	83.2%	14.9%	1%	1%
④ 表情や態度	90.1%	6.9%	1%	2%
⑤ 言葉づかいや 説明の丁寧さ	90.1%	8.9%	0%	1%
⑥ 説明の わかりやすさ	84.2%	14.9%	0%	1%
⑦ 整理整頓	79.2%	18.8%	0%	2%

(2) センター独自アンケート

- ・特になし

3 意見等への主な対応状況

- ・「キャンセルしても返金されない。以前に比べて料金が高くなったので、条件付きで返金してほしい」という声がありました。こちらは、京都市の条例により対応することができないことを回答しました。
- ・網戸の清掃と取り替えが必要であるとコメントをいただきました。こちらは、年末の大掃除の際やスタッフの余力があるタイミングで少しずつですが、実施していることを回答しました。

5. 指定管理者による管理運営業務の自己評価

- ・ 取り組んだ事業等の総括を記載してください。

貸館業務については、昨年度と比較して利用件数が大幅に増加しました。これは昨年度初頭に実施した利用用途の改定が、利用促進に大きく寄与したものと分析しています。今後も利用者のニーズや実情を把握し、柔軟な運用・改善に努めてまいります。

各事業を通じて、子どもから高齢者まで多世代にわたる交流の促進や、地域活動に参画する契機を創出することができました。特に新規の活動希望者に対しては、初期段階の活動支援を重点的に行い、新たな担い手の発掘に繋がりました。

- ・ 今後、解決すべき課題等があれば記載してください。

貸館については、会議を主目的とする会議室については、さらなる稼働率向上のための施策を検討する余地があります。具体的には、オンライン会議や打ち合わせ等の需要に対応するため、Wi-Fi 環境の整備などを視野に入れ、利便性の向上を図る予定です。

事業については、相談件数が増加するなかで、個別の相談を具体的な活動の継続や定着まで繋げきれていないケースも多く、今後の重要な課題として認識しています。今後は単発的なイベントに留まらず、活動の自走化に向けた「継続的な伴走支援」や「地域資源とのマッチング」など、センターとしての支援機能のさらなる拡充を図る必要があります。

- ・ 次年度に向けた対応について記載してください。

貸館については、さらなる稼働率向上に向けた施策の検討とともに、利用者のニーズを捉えた付加価値の提供を継続して実施します。また、利用件数の増加に伴い、施設内の衛生管理や美化活動を一層強化し、各団体がより快適に活用できる利用環境の維持・向上に努めます。

事業においては、下京区全域を視野に入れた広域的な展開を推進します。地域住民や活動団体、個人が直面する課題を的確に把握し、それぞれの実情に即した効果的な支援のあり方を追求します。

6. その他施設の管理運営に関する重要又は異例な事項

特になし